

ナチュラルキス +_{plus} 2

side Keishi

C o n t e n t s

ナチュラルキス^{plus} 2 5
～ side Keishi ～

なによりもしあわせを…… 269

ナチュラルキス_{plus} 2

～ side Keishi ～

1 驚きの訪問

バレンタインデーは終わったんじゃないのか？

化学室の隣にある、科学教諭専用の部屋のソファに座った佐原啓史は、胸の内で、世間に苦々しく問いかけた。

だが実際、今日になってもまだドアの外にはチョコレートを持った女子生徒たちが集まっている。腹が空いているせいで苛立ちが大きくなる。

ドアの前に彼女たちがいては、外にも出られず当然昼飯も手に入れられない。強硬突破しようと思えばもちろんできるが……その氣力がまるでない。

結局は、空腹を受け入れるしかないのだ。

諦めのため息をついた啓史は、天井を見上げて昨日の出来事を振り返り、奥歯を噛み締めた。

榎原沙帆子……

まさか、彼女の家が引越すことになるなんて……だが彼女は、残れるものならば一人暮らしをしても残りたいと思っている。その意志は固いようだった。なにせ、引越しなどしたくないと、彼の前で泣き出したくらいなのだから……

どうしても残りたいのか？ 仲の良い友達と離れたくないから？

もちろんそれもあるだろうが……

彼女は……同級生の広澤脩平ひろさわしゅうへいに好意を持っている。あいつと離れたくないから、引越しを嫌っているのだ。

啓史は血が滲にじみそうなほど強く、唇を噛み締めた。

胸がひりつく。そして、自分が胸をひりつかせている事実……吐き気がするほど怒りが湧く。

啓史は彼女への想いをずっと否定し続けていた。だが、そんなことは無意味だと受け入れたのが昨年の暮れ……

彼女を愛していることを認め、それからずっと、手に入れることを望んできた。だが、いまの彼は教師という立場。そして彼女は、彼の教え子……

唐突に告白などしてもうまくゆくはずがないと、ずっと悶々もんたとする気持ちを抱えていた。それが昨日、破格のチャンスを得たのだ。

授業中気分が悪くなった沙帆子さほんこをこの部屋で休ませ、両親が遅い時間まで帰らないというので自分の家に連れ帰った。

そこまではよかったが、彼女が急に泣き出し、わけを聞くと、引越さなければならなくなったと言っただ。

ようやく彼女との距離を縮められたと思っていたのに……

沙帆子さほんこは引越しを嫌がっていたし、もちろん彼自身も行かせたくなかったから、沙帆子の両親

に、彼女をこちらに残してくれるよう頭を下げて頼んだ。

その結果、ふたりの仲を誤解されてしまい、沙帆子の両親は娘を残す条件として、啓史に結婚しろと言いだしたのだ。もちろん驚いたが、彼にすれば願ってもない話で……

目の前にぶら下がった餌に、彼は何も考えずに飛びついた。結婚は啓史ひとりの気持ちでどうこうできるものではない。沙帆子にもその気がなければ実現しないのに……そんな当たり前のことすらあめるときは頭になくて……

結局、彼はあの場で「沙帆子が好きだ」と叫んだようなもの。目も当てられないほどの大失態だ。あー、馬鹿か俺は……

昨日の自分に対する強烈な怒りが、胸の中で爆発しそうになる。

啓史は目を瞑り、怒りを堪えた。

少し落ち着いたところでソファにもたれかかり、天井を見つめてふっと息を吐く。

これからどうするか……？

昨夜はふたりが付き合っていると思いついていた沙帆子の両親だが、当然、いまは彼女が真実を伝え、その誤解も解けてしまっているだろう。だいたい沙帆子は、他の男に気があるのだ。啓史と結婚なんて、彼女にすればとんでもない話だろう。

そういえば、昨日の帰りしな……あいつを脅したな……

バレンタインのチョコをくれたことを逆手にとって、俺をからかったのなんて口にしちまった。……最悪だ。

啓史は前屈みになり、ため息をつきながらうなだれた。

彼女の両親にも、沙帆子にも、彼の気持ちはバレてしまって……おかげで、これからは難しくなった。啓史の気持ちもバレていなければ、彼女をこちらに残してほしいと頼むのも簡単だったのに……

学校長である伯父の家に下宿させると言えば、彼女の両親だって娘を残すことに同意してくれたに違いないのだ。

もしかして、沙帆子が俺の脅しに屈して、まだ真実を話していないなんてことは？

そう考えた啓史は苦笑した。甘すぎる考えだな……

どうして、沙帆子の携帯番号を聞かなかつたのだろうか？ 聞いてさえいれば……どういう状況になっっているか、知ることができたのに……

あいつ……俺の気持ちを知って……やっぱり、避けようとするだろうか？

このままうやむやにはしておけないと、彼女からやってくるようなことは？

ない……か？

仮にやってきたとしても、彼の部屋の前にいる女子生徒たちの群れを見たら、彼女の性格なら、即座に後戻りしてしまうだろう。

啓史は首をめぐらし、ドアを睨みつけた。部屋の中にあることがバレないように、音ひとつたてられないこの状況……

むかつく……

不意に、コツコツと窓を軽く叩く音がし、啓史は最悪の事態を想定して振り返った。窓の外にあった姿が、彼が振り向いた直後、消えた。

啓史は眉をひそめた。いま、見たものは……？ 沙帆子だったような気がするが、見間違いだろうか？

悶々と彼女のことを考えていたから？ いや、違う。見間違いなどでは……

啓史は、音を立てないように立ち上がり、窓に歩み寄った。緊張し、鼓動が速まる。息をひとつ吐いた啓史は、音を立てないように窓を開けると、下を覗き込んだ。

壁にへばりつくようにして、しゃがみこんでいる人物。やはり沙帆子だ……

彼の胸の中で、純粹な喜びが膨らんだ。

彼女は丸くなるようにしゃがみこんだまま、固まってしまっている。窓が開けられたのはわかっただろうに、顔を上げる気はないようだ。こちらから声をかけるべきだろう。

「ここで何やってる？」

啓史は、窓の外に身を乗り出して、後頭部に向かって小声で問いかける。

沙帆子が、恐る恐るという感じで顔を上げた。

それにしても、こいつはどこからやってきたのだろう？

この校舎は完全に垣根に囲まれているから、外からは入り込めないはずなのに……

一ヶ所ドアがあるにはあるのだが、鍵がかかっている、生徒たちは出入りできない。

「お話したいことがありますよ」

おずおずと沙帆子が切り出してきて、啓史は気を引きしめた。

話したいことは、もちろん昨日のことだろう。両親の誤解がとけ、馬鹿馬鹿しい結婚話が消滅したという報告に違いない。

だが、内容はともかく、沙帆子がこうして会いに来てくれたのだ。ここはチャンスと捉えるべきだろう。

そう考えた啓史は、急にさきほどから悩まされていた空腹を思い出した。ポケットをまさぐり、財布を取り出す。聞きたくもない報告より、この空腹をなんとかしたい。

千円札を抜き取った啓史は、無言で沙帆子に差し出した。当然、沙帆子はきよんとしている。

「へっ？ あの……」

「パン、買ってこい。二つか、三つ。あとペットボトルのお茶」

啓史は囁くように彼女に命じた。

「パ、パンと、お茶？」

素っ頓狂な顔というのは、こういう表情なのかもしれない。沙帆子のちよつとまぬけな戸惑い顔を見て、笑いが込み上げてきたが、ぐっと堪えた。

「ハンバーガーとか、コロツケパンがいいが、なければなんでもいい。早くしろよ、時間がないんだからな」

傲慢な命令口調に反抗できなかったのか、納得できない様子ながらも、彼女は千円札を手に垣根へと向かった。いったいどうするつもりなのかと見ていたら、突然しゃがみこんで四つんばいにな

り、垣根の中に潜り込んでゆく。この角度からはわからないが、どうもその部分に穴があるようだ。魔術のように姿を消した沙帆子に、啓史は狐につままれた気分になった。

……あいつ、いまここにいたよな？

啓史は手にしている財布の中身を確かめ、確かに千円札が一枚消えているのを確認して、唇を突き出した。

どうやら……現実と思っ正しいらしい。

2 懐柔の決意

沙帆子にパンを買いに行かせたのは自分なのに、戻りを待っている時間はどうにも長く感じられ、啓史はだんだん苛ついてきた。

嫌な話を先延ばしにしたいばかりに、せっかくなってきた彼女を……

馬鹿か俺は……

嫌なことはさっさと済ませて、一からやり直さないといけないのに、昼休みは刻々と過ぎてゆく。苛立ち始めた自分を、啓史はなんとかなだめようとしたり。

腹が減っているからだ。何か口にして腹を満たせば、いい考えも浮かぶだろう。空腹で苛立ったまま彼女と話しても、いい結果を生み出せるはずがない。

だろ？

沙帆子を見送ったときのままの姿勢で、己と問答していた啓史は、視界に何か動くものを捉え意識を向けた。

小さな頭が見え、上半身が出てきて、全身が現れた。

安堵と喜びが湧いた。

垣根を潜り抜け、立ち上がった彼女は、全力疾走してきたのか、ずいぶんと荒い息をつきながら近づいてくる。彼女と目を合わせた啓史は、口に人差し指を当てて静かにするように伝え、手を差し出した。沙帆子を部屋に入れるつもりで手を差し伸べたのだが、彼女は買ってきたものとおつりを申し訳なさそうに手渡してきた。

「あの、頼まれたもの、なかったんです。すみません」

小さな声で詫げる彼女に、啓史はまた手を差し出した。

彼女はひどく驚いたようで「え？」と叫ぶ。

「入ってこい」

彼の言葉に沙帆子は身を硬くしたが、それでも啓史の手を掴み、窓をよじ登って窓枠に立った。

啓史は音を立てないように気を配りながら、沙帆子の身体を抱え、部屋の中に入れた。

その気になれば、即座に抱きしめられる距離に、甘い誘惑を感じる。もちろん、行動に移すべきではないことはわかっている。

「物音を立てるなよ。……ソファに座れ」

沙帆子の耳に口を寄せて囁くと、彼女はおもちゃみたいにくくくと頷く。啓史の視線は、目の前にある沙帆子の桃色の耳たぶに引き寄せられた。口に含んでみたい……そんなことを本気で考えている自分に、啓史はどきりとした。

そんな彼の心情も知らず、沙帆子はぎこちない歩みでソファへと移動し、座り込んだ。自分がさっきまで座っていた場所に、沙帆子が座っている。

奇妙な感覚に囚われた。空を飛んでいる鳥を捕らえ、籠に閉じ込めたような……充足感……

啓史はゆっくりと息を吸って自分を落ち着かせ、彼女に歩み寄った。沙帆子を腕の中に閉じ込めたがる自分を危うく思いながら、ソファに片手をつき、彼女の耳に唇を寄せる。

沙帆子から立ち上る微かな甘い香りが欲望をくすぐる。

まずいな。タガが外れかかっている。

「コーヒー飲むか？」

沙帆子はこくりと頷いた。彼女のほうへ屈み込んでいた啓史はゆっくりと身を起こし、机に歩み寄る。

抱くべきではない感情に囚われすぎている。落ち着くべきだな。

それにしても、昨日は彼女とふたりきりでも、こんな風に欲望に駆られたりはしなかったのに……なぜいま？

どうして冷静でいられない……？

カップにインスタントコーヒーを入れ、砂糖を手取る。今日はミルクもある。昨日、榎原家か

らの帰り道、コンビ二に寄って調達したのだ。昨日のことについて話をしようと、彼女をここに呼び出すつもりで……まさか彼女のほうから来てくれるとは……

砂糖をどのくらい入れればいいのか沙帆子に尋ねようかと思ったが、なんとなく口に出せなかった。そんなことを聞いたら、彼女のためにわざわざ砂糖を用意したのが、まるわかりだ。

そこまで考えて、啓史は顔を歪めた。

すでにこいつは、俺が自分のことを好きだと、わかっているはずだ。

いまさらだな……隠す必要もないさ……

沙帆子のコーヒーに砂糖とミルクを入れ、スプーンでかき混ぜながら、啓史はそつと息を吐き出した。

ふたつのカップを手を振り返ると、沙帆子がいくぶん慌てたように顔を伏せた。

こいつ、俺のこと見てたのか？

そう思うと、背中あたりがむずむずしてきた。もちろん、悪い気はしなかったが、気恥ずかしい。カップを沙帆子に手渡すと、啓史はわざと密着するように彼女の隣に座り込んだ。

もともとそんなに大きなソファではないから、さほど不自然ではないはずだが……

啓史は沙帆子の反応を窺おうとして、彼女の顔をそつと覗き込む。

なんだか、がちがちに緊張しているように見えた。

身体が触れ合っているのを意識しているのか？ それとも、どう話を切り出そうかと悩んでいるのだろうか？

結婚の話が消えたことは、間違いない。

俺を少しでも傷つけないように、言葉を探しているのかもしれないな。

コーヒーを一口飲んだ沙帆子が、驚きの表情で彼を見上げてきた。きつと砂糖とミルクが入っていることに驚いたんだろう。だが、彼女は何も言わぬまま、ただ見つめてくる。

沙帆子と目を合わせていられず、啓史は先に目を逸らした。

コーヒーを一口啜った啓史は、沙帆子を買ってきたジャムパンを掴んだ。ビニール袋が音を立てる。彼は眉をひそめると、音を最小限にと苦慮しながら袋からパンを取り出した。腹は最大値まで減っていたが、半分に分けたパンの中から真っ赤なジャムが現れた途端、食欲は急激に低下した。

「あの？」

沙帆子の呼びかけに啓史はびっくりとした。とうとう話を切り出そうというのだろう。聞きたくない話を聞かされることに怯んでいる自分が苦々しい。啓史は自覚なく、鋭い目を沙帆子に向けていた。彼女は、何か言おうとして開けていた口をパクンと閉じる。苛立った啓史は、沙帆子にぐつと顔を近づけた。

「なんだ？」

「あ、あ。お砂糖とミルク」

そう言っ、自分の持つているカップを指さしてみせる。

「ああ」

なんだ、そっちな……

気が抜けた啓史は、視線をパンのジャムに戻した。憎いのは、ジャムよりも、この自分。

だんだん大きくなっていくムカツキを、そもその原因である沙帆子に向けたくなってくる。

そういえば……こいつ。甘いもん、好きだよな。

いつの間にか、啓史は半分に分かれたパンを彼女の前に突き出していた。

この甘いジャムだけ、処理してくれないものだろうか？

切実な願いだったが、さすがに無茶だろう。

そう思い直したとき、沙帆子が口を開けた。こともあろうに、彼のパンをかじろうとしている。

啓史は咄嗟にパンを引いた。獲物を捕らえそこねた彼女の歯が、カチンと鳴る。

こいつ、俺のパンを断りもなく食おうとしやがるとは……

「舐める」

啓史は思わずそう言っていた。

彼女はひどく驚いた顔になった。問うような色が瞳に浮かんでいたが、啓史は無視することにした。

「ジャムだけだ。全部舐める」

「ど、どうして？」

どうして？

啓史は顔をぐつと近づけた。驚いた彼女が身を引いたことにむつとした啓史は、さらに顔を近づける。

「嫌いだからに決まってるだろ。だが、ジャムを舐めるだけだぞ。パンは食うなよ。俺の食う分が

なくなる」

「あうっ」

彼女は奇妙な声を上げパンを受け取ったが、そのパンをじっと見つめるばかりだ。

「おい、早くしろよ。昼が過ぎちまうだろう」

「は、は、はいっ」

声を潜めながらも理不尽に怒鳴りつけたのが功を奏したのか、彼女はやっとジャムを舐め始めた。啓史はジャムのなくなったパンを取り上げると、すぐに頬張る。今日初めての食事としては、なんとも怪しい品なのだが、うまかった。さらにアンパンの餡とチョコパンのチョコも舐めさせる。

中身のなくなったパンをコーヒーを飲みながら夢中でパクついていると、あつという間になくなってしまった。満ち足りたとはいえなかったが、それでも空腹感はなくなった。コーヒーを飲み終えて時計に目をやると、まもなく昼休みも終わる時間だ。沙帆子を見てみると、コーヒーカップに口をつけたまま、どこかぼうっとした表情をしている。啓史は、沙帆子の耳に唇を近づけた。

「榎原、そろそろ時間だぞ」

啓史は囁くように言ったが、目は彼女の耳たぶに釘付けになっていた。ほんの少し近づければ、彼女の耳に唇で触れられる。そう考えた瞬間、彼の唇は沙帆子の耳に触れていた。微かな接触到とくと心臓が跳ねる。すつと顔を引き、彼女の様子を窺ったが、まるきり反応がない。

なんだ？ 気づかなかったのか？

面白くない……

「榎原、俺の声、聞こえてるか？」

啓史は少し棘のある声で話しかけた。

視線が動き、彼女はようやく啓史と目を合わせたか、まだ反応らしい反応はない。

もしかして……

「甘いもんばっかり食べすぎて、こいつ……壊れたか？」

もうすぐ午後の授業が始まるし、さすがにこれ以上ここに留めてはおけない。

啓史はもう一度時間を確かめ、立ち上がるとドアに歩み寄って耳を澄ませた。

物音はしないが……いるかいけないか、はつきりとはわからない。

啓史は足音を立てないようにゆっくりと戻り、前屈みになって、ソファに座って自分をじっと見つめている沙帆子の耳元に顔を近づけた。

「お前、窓から帰れ」

そう囁くように言うと彼女を抱え上げ、そのまま窓へと向かって窓枠に乘せてやった。

啓史に抱え上げられて、彼女は驚いたようだが、何も言っただけでこなかった。

「気をつけて下りろよ」

外に下ろそうとする啓史に対して、彼女はなぜか強く抵抗し、踏ん張ったまま下りようとしな

「で、でも先生、お話がまだ」

「ああ……」

話か……そういえばそうだった。

「そう言ってたな。放課後また来い」

「ま、また窓からですか？」

不服と惨めさの混じった声に、啓史は笑いを堪えた。

来る方法に文句はあるようだが、啓史のところに来ることに異論はないようだ。

「ああ。そのほうがいい」

啓史はそう言うと、彼女を外に下ろした。

「気をつけてな」

窓の外に下りた彼女は、「は……はい」と頷き、すぐに垣根の中に潜り込んでいった。

ずいぶんといいい専用通路を見つけたもんだ。

放課後も来ると約束したし……またふたりきりの時間が持てるわけか。

□元がほころびそうになったが、そう喜んでもいられない。昨夜、あれからどうなったのか。しつかりと話を聞かなければ……これからのことについても、話す必要があるし……

考え込んでいるところに、垣根のほうに動くものを捉え、啓史は眉を寄せた。なんとさきほど消えたはずの沙帆子の身体が垣根から出てきたのだ。後ろ向きのまま戻ってこようとしているものだから、やたら手間取っている。

ずいぶんと見甲斐のある光景に啓史は笑いを堪えた。ようやく四つん這いだった彼女が身を起し、こちらを振り返ってくる。ふたりの目が合った途端、沙帆子はむうっとした顔で、睨みつけてきた。こうなると、彼女が何をしてもおかしい。

派手に吹き出した啓史のところに、沙帆子は戻ってきた。いったい何をしに戻ってきたのかと思つたら、「白とピンク、どっちが好きですか？」と不服そうに問う。質問の意味がまるで理解できず、啓史は眉を上げた。

「白とピンク？ どっちも……」

「どうも」

返事の途中で、なぜか沙帆子はそう言い捨て、また穴に戻っていった……消えた。

啓史は垣根の一点を見つめ、首を傾げた。

「いったいなんだったんだ？」

わざわざ戻ってきて、白とピンク？ それも最後まで返事も聞かずに……

腑に落ちなかつたが、彼女は放課後またやってくるはずだ。その時に聞けばいいだろう。

啓史は窓を閉め、背を向けると、そのままそこにもたれて腕を組んだ。

テーブルの上には、沙帆子の使ったコーヒーカーップがある。

あいつ、かなり押しに弱いよな？

相手の意思を無視して、無理やりなんてことをするつもりは、もちろんないが……

ちよつとばかり強引に進めてゆけば、啓史の思惑どおりにいくんじゃないだろうか？

そうこうしながら、ふたりの時間を重ねてゆけば……懐柔するのは、思ったよりたやすいかもしれない。

自分の甘すぎる策略を啓史は鼻で笑ったが、やがて笑みを消して真顔になった。

少しでもやる価値があると思えるなら、なんでもやってやろう。
なによりもまず、啓史を教師ではなく、男として意識させることが必要だ。

3 心の問いかけ

明日の授業の準備を終えた啓史は、凝った身体をほぐすために、大きく伸びをした。
コーヒーでも飲むか？ 研究課題にも手をつけたいが……
ところで……いま何時だろう？

腕時計に目をおとした啓史は、眉を上げた。

思ったより時間が過ぎていて、すでに放課後になっている。啓史はパツと後方にある窓を振り向いた。

もしかして、沙帆子が来ているのではないかと思ったが、そこに彼女の姿はない。立ち上がって窓に向かおうとした啓史は、ドアの外から聞こえてきた声に、ぴたりと動きを止めた。

まさか、また？

ドアに近づき耳を寄せて窺うと、やはり複数の女子生徒がいるようだ。

啓史は舌打ちしそうになるのを、ぐっと我慢した。

コンコンとドアがノックされたが、もちろん返事などしない。

「やっぱ、いないのかな、佐原先生……」

「けど職員室にはいなかったじゃん。だとしたら、この部屋にいるのかも」

「でも返事ないし……。あーあ、せっかくのチョコ……無駄になっちゃったなあ」

「でもさ、結局、誰も受け取ってもらえなかったみたいだよ」

「やっぱ、佐原先生に彼女がいるって噂、ほんとなのかな？」

「ねえ、ちよつとあんた声大きいよ。先生が中にいたら、聞かれちゃってるんだよ」

少しの間、静まり返ったが、また話し声が聞こえ始めた。

「バケ子先生って噂……信じる？」

バケ子先生という言葉に拒否反応を起こし、啓史は顔を歪めた。生徒たちにバケ子とあだ名されているのは、化粧の濃い女性教諭のことだ。この教諭には、これまで散々嫌な目に遭わされている。

「あんたねえ、それだけはないよ。佐原先生が、あんなケバイ女、相手にするはずないって」

「だよねえ」

俺に彼女がいるという噂が流れてるのか？ それならそれで都合がいい。

「ねえ、もう行く？」

「うーん、だねえ」

どうやら、帰る気になってくれたらしい。

遠ざかってゆく足音を耳にして、啓史はほっとした。

窓に歩み寄り、ゆっくりと開ける。外の空気は多少冷たいが、寒さに震えるほどではない。開け

ておけば、彼女がやってきたらすぐに気づけるだろう。

彼女の専用通路のあたりをじっと見つめていた啓史は、そんな自分に気づいて眉をひそめた。なんで俺はこんなに期待しているんだ！

啓史はくりりと後ろを向くと、口をへの字にまげて無意識にポケットをまさぐった。白衣のポケットの、右、左、そしてズボンの片方のポケットに手を入れたところで、啓史は我に返った。

何やってる？ タバコなんて、どこにもないぞ！

くそっ！

苛立つて髪をかきむしった啓史は、垣根の向こう側から人が走ってくる足音が近づいてくるのに気づいた。

やつと来たか……

「あ……れ？ 江藤さん」

男の声だ。啓史は眉をひそめた。いまの声は、聞き覚えがある。それに江藤とは……まさか……

沙帆子と仲のいい江藤詩織か？

「広澤君」

やはり江藤だ。それに男の声は、間違いなく広澤……

こいつは、沙帆子が好意を寄せている男。そして、沙帆子がバレンタインデーのチョコを渡そうとしていた相手。もしも昨日、啓史が沙帆子からチョコを取り上げなかつたら、チョコはこいつの手に渡り、ふたりは付き合い始めていたはず。

胸にじわりと嫉妬の感情が湧き、啓史は口元を引き締めた。

「どうして……君が？」

「う、うん。沙帆子の代理。ごめん」

沙帆子の代理？ ……いったいどういうことだ？

「そっか。つまり……そうか」

「あ、あの……広澤君、あのさあ」

「振られて慰めなんてもらいたくない。……江藤さん、もういいよ。それじゃ」

振られた……？ それは、沙帆子にとってこと……か？

「あ、あのだからさ。広澤君」

「何？」

「そんな簡単に、諦めちゃうことないと思うんだ。いつそのこと、面と向かって告白しちゃったらどうか？」

「で、玉砕しろって？」

「ううん、そういうんじゃない……ただ、わたしの経験から言わせてもらおうとね。わたし、いまの彼氏別に好きってわけじゃなかったけど、告られて付き合い出したんだ。……沙帆子は、まだ男のひとと付き合った経験ってないからさ」

啓史は、目の前の垣根を睨みつけたまま、会話の内容を理解しようとした。

どうやら広澤は、ここに沙帆子を呼び出したらしい。だが、あいつは江藤を代理で寄越した。

あいつ、もしかして、自分で来たかったのに、来れなかったのではないだろうか？ 呼び出されたところが、こともあるうにこの部屋の前で、会話が俺に筒抜けになるのを危惧して……

「相手のこといいなとかって思っても、そう簡単にオツケーしたりしないと思うわけ」

江藤の言葉に、啓史は無然とした。

広澤のことを沙帆子がいいなと思ってるのは、本当だ。

怒りとやるせなさに歯を食い縛った啓史は、視界の端に動くものを捉えて、さっと目を向けた。こ、こいつ！

いつからそこにいたのか、沙帆子が校舎の壁にくつつくようにしてしゃがみこみながら、よたよたと前進してくる。

啓史は顔を引きつらせた。驚かせやがって……

こいつときたら、なんだって、こんな突拍子もないところからばかり、現れやがる。

「それにね、沙帆子、本気で広澤君にチョコあげる気になってたんだよ。だからさ、自信持って」大きな声で江藤が言った。その言葉は、啓史のハートを的確に刺した。

本気で、チョコをあげる気だった？

啓史は、いまだ自分に気づいていない沙帆子を、怒りに駆られて冷たく見据えた。

直後、江藤が広澤の肩でも叩いたのか、パシンという音が聞こえ、それにびくりしたらしい沙帆子が顔を上げた。その瞬間、彼女は啓史に気づいた。そして、ぎよつとした顔で固まる。

「それってほんと？」

期待を含んだ広澤の声に、苦いものが込み上げる。啓史は沙帆子を見据えたまま拳を固めた。

「うん。ほんとだよ」

江藤の明るい返事。しゃがんでいる沙帆子は、精神的打撃を受けたように、少しよろめいた。

この野郎！ 精神的打撃を受けたのは、こっちだってんだ。ぜってえ、ただじゃおかねえぞ。

啓史は沙帆子に向けて手を突き出し、こっちにこいとぐいっと上げた。怯えた小動物のように、彼女は小刻みに首を左右に振って拒否する。啓史は憤りもあらわに、もう一度同じ命令を繰り返した。諦めたのか、沙帆子は泣きそうな顔で屈んだまま前進してくる。

江藤と広澤のほうは話が終わってこの場から離れたらしく、すでに気配はない。

ようやく目の前にやってきた彼女に両手を差し出し、啓史は部屋に入れた。

広澤の存在が、啓史に痛みを与える。

啓史は、自分の腕の中にいる沙帆子の頭のとっぺんを見つめた。

広澤が好きなのか？

絶対に答えをもらいたくない質問が、胸の内で出口を探して暴れている。

啓史は自分をなだめた。

お前はもともと、あのチョコが、広澤のために用意されたものだと思ってたじゃないか。

彼女は広澤に渡さなかった。渡すチャンスはいくらでもあったはずだ。でも、渡さなかった。

それは、迷いがあったからじゃないのか？

そして、そのチョコは啓史の手に転がり込んできた。

いまはまだ広澤のほうが優位かもしれない。だが、すぐに逆転してやる。啓史は手を伸ばし、右手で窓を閉めた。

「あ、の……」

沙帆子の呟きを無視して、啓史は両手を窓につき、彼女の頭を挟むような姿勢で、顔を近づけた。
「あ……あのぉ」

お前は、俺のことを好きになるんだ！ 必ずそうさせてやる！

おどおどと見返してくる彼女を見つめ、啓史は心の中で宣言した。まるで啓史の心の声が聞こえたかのように、彼女の頬が赤く染まっていく。

彼女の変化を見つめながら、啓史は口を開いた。

「納得のいく弁明、できるんだろうな？」

「え？」

ぼかんとした表情と声に、啓史はカチンときた。

こっちは嫉妬に駆られているというのに……こんの野郎！

「弁明だ、弁明」

啓史に凄まれた沙帆子は、なぜか拗ねたような目になって、彼を見上げてきた。

やたら可愛いのが、こんなもんじゃ、いまの強烈な苛立ちは消えない。

「おい」

「あ、あれは……違うんです」

「違う？」

「ですから、その……断ってきてって、詩織に頼んだんです」

「ほお、俺には、煽ってたとか思えなかつたが？」

沙帆子は、啓史の視線から逃れるように顔を伏せる。その仕草にムカツキがさらに煽られる。顎に指をかけて顔を上げさせ、啓史は彼女の瞳を覗き込んだ。ふたりの身体は触れそうなほど近く、顎には彼の指がかかっているが、沙帆子に嫌がっている気配はない。

「お前……」

俺のこと、嫌いじゃないよな？

啓史は彼女のふつくらとやわらかそうな唇を、じつと見つめた。

いまなら、ふたりの唇を重ねるのは、たやすい……

それを望んでやまない自分を、彼は抑え込んだ。浅はかなことをして、後悔したくない。

「コーヒー、飲むか？」

彼女は頬を染めたまま返事をしない。近すぎるこの距離に、どうしていいかわからなくなっているのだろうか？

それとも、彼がキスを望んでいることに、感づいたか？

……やりすぎちゃいないよな？ 不安が湧き、啓史は眉を寄せた。

「コーヒーだ。飲むのか？」

今度は沙帆子が頷いてくれたので、啓史はほっとした。

コーヒーを手渡し、彼女の隣に座り込む。しばらくコーヒーを啜りながら、沙帆子が話を切り出すのを待ったが、彼女は黙り込んだままだ。しびれを切らした啓史は、仕方なしに話を促した。

「それで、用はなんだ？」

「あ……」

言いにくそうに口ごもられ、啓史は息を止めた。彼女が言うことは、すでにわかっている。

「はい。先生の電話番号を教えてくださいだこうと……」

は？

啓史は一瞬ぼかんとした。

こいつ、いまなんて？ 電話番号？

あまりに意外な言葉に、沙帆子の横顔を穴が開きそうなほど見つめてしまう。沙帆子がちらりと視線を向けてきた。ふたりの目が合った瞬間、啓史は「そうか」と反射的に口にしていった。

「こ、これから必要になるから母が教えてくれて……」

これから必要……それって……どうということだ？

俯うつむいている沙帆子の横顔は、ひどく気まずそうに見える。

これから必要？ それって、なんに對しての……まさか……結婚？

啓史は頬を引きつらせた。

ま、まさか……だよな？

4 自分への落胆

「携帯だせ」

頭の中は、混乱気味だったが、啓史は沙帆子に手を差し出した。

彼女は素直に携帯を取り出し、彼の手の平に載せる。

手の上にある沙帆子の携帯をまじまじと見つめたあと、啓史はそれを開き、自分の番号を押した。

彼の携帯が胸元で振動する。自分の携帯を取り出しつつ、彼は沙帆子に携帯を返した。

携帯のディスプレイに彼女の携帯からの着信が表示されているのを確認した途端、それまでおとなしかった心臓が急に鼓動を速めた。ちらりと彼女を窺うかがうと、沙帆子も彼の番号を登録しようとしている。

啓史は沙帆子の携帯のディスプレイを覗き込みながら、「啓史」と、自分の名を口にした。

「俺の名前だ。知ってたか？」

「し、知ってますた」

「ますた？」

啓史は、彼女の口にした言葉を思わず繰り返していた。別にからかおうと思っただけではなく、おかしい言葉に反応したにすぎなかったのだが、沙帆子を見ると、気まずそうに頬を染めている。

いや、少しむっとしてもいるか……

「し、知ってます。漢字だって……ほらこれ？」

確かに、彼女の携帯のディスプレイには、啓史のフルネームが正しく表示されていた。

「ふん」

嬉しさを言葉に滲にじませないように、啓史はそっけなく言った。

「あの。先生？」

「うん？」

「わたしたち……」

言葉に困っている沙帆子の様子に、啓史は居心地が悪くなった。

言いたいことがあるなら、さっさと言えばいいのに……

だが、これから電話番号が必要になるというのは……いったいどういう意味なのだ？ 結婚の話

は、なかったことになりましたと、言いに来たんじゃないのか？ まさか、本当にまだ……

啓史は、ありもしないタバコを探してポケットを探っている自分に気づき、動きを止めた。そして、自分を見つめている沙帆子に顔を向ける。

結婚の話はどうなった？

「そう聞くつもりだったのに、口から出た言葉はまったく違うものだった。」

「ゲーム、やりに来るか？」

「え？」

沙帆子はきよとした顔で、啓史を見つめ返してきた。

彼女の反応も当然だろう、あまりに唐突な誘いだ。だが、いまさら取り消せない。

「週末」

唐突すぎたが、これでもし、彼女が遊びに来れば、ふたりきりの時間を過ごせる。またゲームを

やらないかと、さりげなく付け足そうとしたが、沙帆子が「あ……」と声を上げ、啓史はその言葉

を口にできなかつた。沙帆子は、ひどく困った顔をしている。

「それが、その……」

沙帆子は俯うつむき、「ですね」と続ける。

「用事があるってのか？」

失望が胸に広がり、言葉が無意識のうちにとげとげしくなった。

そうそううまくゆかないよな。冷静に考えればそう思うのに、断られた落胆から、苛いら立つてきてしまう。

「えっと。よ、用事とかそんなのじゃなくて……ですね」

その言葉に、腹立ちはさらに膨れ上がる。

「それじゃなんだ？」

ただ、俺んところは来たくないってのか？

彼の声の大きさに驚いたらしい彼女は、両手で彼の口を覆ってきた。

「せ、先生、声大きいです」

啓史は自分を落ち着かせようと息を吸い、目を閉じてソファにもたれた。

「そ、外にいるひとに、聞こえたんじゃないでしょうか？」

彼の耳に口を寄せるようにして、彼女は不安の色を滲ませた声で言う。

いまの、このふたりの距離に、啓史はたまらないもどかしさを感じた。

彼の誘いを断つたくせに、どうしてこれほどくっついてくるのだろう。

彼女をソファに押し倒してめちゃくちゃにしてやるうかなんて、どす黒い感情が湧き上がってくる。だが、そんなことをしたら、何もかも終わりだぞ。

自分自身から警告され、啓史の苛立ちはさらに増した。

「どうせここにいることは知られてるんだ。電話でもしてると思ってるさ」

彼は時間を確かめ、ドアに視線を向けた。

いないのを確かめたわけではないから、いるのかもしれないが……

「もういないかもしれないしな」

自分の言葉が鋭くなっていることに、さらにムカツキが増す。これじゃまるで、思うようにいかず駄々をこねるガキみたいじゃねえか。

「お前、用事終わつたんだろ。もう帰れば」

自分でもういぶん意地の悪い言い方をしたと思った。

大失敗だ。これからのために、もつとうまくやらなければならぬのに……

何やってんだ……俺は……

彼女が立ち上がり窓に歩み寄つたのを見て、啓史は焦りを感じた。このまま帰してしまうわけには……。けれど、腹立たしさはまだ彼の胸に巣食っていて素直になれない。このまま行かせたくないのに、引き止めるための口実など思いつかないし、たとえ思いつけたとしても、口にできそうになかった。

啓史はため息をついた。

自分がかかりだ。

彼は諦めて立ち上がった。

「榎原」

沙帆子は返事をしなかった。身を強張らせ、俯いてしまっている。彼女は、自分ひとりではこの窓枠に登れないから、まだここにいるにすぎないのだ。

啓史は仕方なく彼女の腰に手を当て、外に出るのを手伝った。窓枠に足をかけた途端、彼の手を振り切るように、沙帆子はジャンプして外へと飛び下りた。

「お、おい」

彼の呼びかけなど無視して、彼女は垣根の中に潜り込み、あつという間に視界から消える。

これ以上ないほどの悔いを感じた。自分の愚かしさに呆れてならない。

もどかしさと虚しさに、胸が蝕まれる。

啓史は、長いことそのまま立ち尽くしていた。

5 皮肉風味のやわらかい問いかけ

啓史は肩を落とし、ソファに仰向けにひっくり返った。胸の中は落胆で埋まっていた。どうしてもつとまくやれないのかと、自分をなじりたくなる。せつかく神がくれた、ありえないほどのチャンスだつてのに、お前は苛立ちに駆られて何もかもふいにするつもりか？

啓史はいま自分が横になっているソファに目を向けた。……ほんのいましがたまで、ここに沙帆子が座っていたのだ。

誘いを断られたくらいで拗ねて、何もかもを駄目にするなんて、あまりに愚かしいぞ！

彼はむっくりと起き上がり、気持ちをリセットしようと、息を吐き出した。

どうするか？

顎に手を当てて考え込んだ啓史は、ふと眉間を寄せた。

そういえば……結婚の話………いつたいどうなったんだ？

なかったことになったんだろ？ もちろん？

目を細めながら、沙帆子の口にした言葉を思い返す。

電話番号を聞いてきて……これから必要になるとか………言ったよな？

これから必要に………？

それって………

信じられないことだが、どうやらまだ、結婚の話は立ち消えになっていないということなんじゃないか？

啓史は思わず自分の頬をぎゅっと抓つかっていた。

痛いよな………ちゃんと………

けど………なんでだ？

つまり………あいつ、引っ越すするぐらいなら、俺と結婚するほうがいいってことか？

啓史は顔をしかめた。

あいつ、何考えてんだ？ 俺が、引っ越さずにすむように手を貸すと言ったから………これから何かうまい作戦があるとも思ってるのか？

沙帆子のほわほわした顔を思い浮かべた啓史は、引きつった笑いを漏らした。

あるかもしれん………

だとしたら、俺はどうすりゃいいんだ………？

このチャンスをとことん利用するべきか？

さすがに結婚はないぞと、沙帆子に言うべきか？

だが、そうなるか、どうなるか？

そうなったとしたら、正攻法で一からやり直すだけだろう。

つまり、結婚話はなくなり、はじめに戻って、彼女をここに残してほしいと改めて両親を説得する……か。

それが一番良さそうだった。このまま結婚話を進めてゆけば、いずれ彼女は現実を受け止めきれなくなつて逃げ出すに違いない。やはり、手堅くいくしかない……それが一番だろう。

結論を出した啓史は、携帯を手にして、じつと見つめた。

あいつ、まだ怒つてんだらうな……

電話してみるか？ いまはまだ電車の中だろうから、家に着いた頃、電話してみよう。

それにしてもあの野郎、週末、なんの用事があるつてんだ。

いや、待てよ。用事とかじゃないとか、言っていなかったか？

それつて、ただ、俺んどこに来たくないつてことで……つまり……俺とふたりきりになりたくない？

啓史は心の底から落ち込んだ。

しばし落ち込んでいた啓史は立ち上がり、気分直しにコーヒを飲むことにした。

机に寄りかかつてコーヒを飲んでいた彼は、思いついて机の引き出しを開ける。

昨日、沙帆子から取り上げたチョコの包み……

今朝、白衣から取り出したものの、どう処理していいか困つてここに放り込んだのだ。

啓史は綺麗にラッピングされた箱を掴み出したが、急に憤りに駆られて机の上に投げ出した。箱

は重ねられた本に当たつて跳ね返り、机の端で止まる。

こいつは、広澤にと、彼女が買ったチョコ。

箱をもう一度掴み、啓史はゴミ箱に放り込もうとして……ためらつた。

でもこいつは、沙帆子の手から直接取り上げて……現実には、俺がもらったことになつてるんだよな？

どんな形であれ、啓史に渡つたこのチョコが捨てられたなんて、彼女にすればいい気分じゃないだろう。

啓史はチョコの箱を見つめ、仕方なくもとの場所に収めた。

あー馬鹿か、俺は……

啓史はソファに転がり、組んだ両手に頭を乗せて、天井を見つめた。

ポケットの中で着信音が鳴り、彼はうざつたい気分ですぐ携帯を取り出した。表示を確かめて驚く。沙帆子……から？

彼女が啓史に電話をかけてくるなんて、すぐには信じられなかった。

目を見張っていた啓史は、気を取り直して身を起こし、携帯を耳に当て、「はい」と口にした。緊張して、どうにも声が強張つてしまう。

「ああ、啓史君。わたし、芙美子です」

やたら明るい、パワーのある声に、啓史は面食らつた。芙美子という……？

「榎原のお母さんですか？」

「そうそう」

自分が誰なのか、啓史がわかったことが嬉しかったのか、声がさらに明るさを増す。

「土曜日のことなんだけど、わたしたち十時には出発する予定なのね。だから、啓史君、沙帆子のこと九時半には迎えに来てちょうだいね」

啓史は眉を寄せた。この、畳みかけるような言葉の意味がまったくわからない。だが、沙帆子の母親は、彼がすべて理解していると思っ込んでいるようだった。

土曜日……十時に出発？ 九時半に……なんだって？

「あ、あのねっ、マ、ママ」

「帰りは日曜日の夜」

焦りまくった沙帆子の声が聞こえたものの、芙美子が再び語り始めたので、啓史はそちらに意識を集中した。

「時間ははつきりしないけど、また電話で連絡取り合えばいいわね」

日曜の夜？ 誰が帰るって？

「代わって、ママ、代わって」

慌てふためいた沙帆子の声。

「もう、まだ話があるのよ。あとで代わるから、もうちょっと待ちなさい」

どこか叩かれてもしたのか、ペシンという音と、「はふっ」という、沙帆子のもらしいおかし

な声が聞こえた。

「初めてのお泊まりだから、女親のわたしとしては力が入っちゃって」

初めてのオトマリ？ ……オトマリってなんだ？

「もう、すっごい可愛いお泊まりセット揃えたの。啓史君、楽しみにしててね」

オトマリセット？

何を言われているのか、さっぱりわからない。

「それから、ひとつ真面目な話」

芙美子の声が、いやに改まったものになり、啓史は眉をひそめた。

「なんでしょうか？」

「すぐに結婚するんだとしても、やっぱり、高校は普通に卒業させたいし」

結婚……

やはり、結婚の話は……まだ……

驚きが再び湧き上がる。

「そのどころ、間違いないように気を引き締めてちょうだい」

まるで理解できていないのに、どんな話が進んでゆく。啓史は内心首を傾げていたが、答えを要求されているのを感じ、「わかりました」と答えていた。

「買い置きを使いかけもあるだろうけど、そんなの捨てて、これからは、わたしが持たせるいいやつ使ってちょうだいね」

その言葉を聞いた瞬間、先ほどは理解できなかったオトマリという言葉が、彼の頭の中で一瞬にして意味を成した。

お泊まり？

お泊まりだあ〜？

胸にどんと衝撃を受け、啓史は頭の中で叫んだ。

誰がどこに泊まるんだって？

ま、まさかと思うが……泊まるってのか？ 俺んどこに……沙帆子が？

本気でお泊まりさせるつもりなのか？ ……マジかよ？

鈍い痛みを感じ、啓史は頭を抱えた。どうやら、とんでもない誤解があるようだ。まず間違いない、沙帆子の両親は……沙帆子と啓史の付き合いの深さを誤解している。

「ママ、これ……？」

「そう、それ」

何がこれで、そうそれなのだ！

「それとね。沙帆子、明日からお弁当作ってくって、もうすっごい張り切ってるわよ」

「弁当を、俺にですか？」

驚きとともに口にしたものの、張り切ってるという言葉は、信じられない。あんな風に、気まずい状態で、ここから帰らせてしまったのに……

「もっちゃんよお。夫のあなたに作らず、誰に作ってゆくというのよお」

お、夫……

ぎよっとさせられた啓史は、心の中で疲れたため息をついた。沙帆子の母には、ついてゆけそうもない。

「わたしはどうまくなけれど、沙帆子の愛情たっぷりよ。食べてあげてねん。……それじゃ、沙帆子に代わるわね」

芙美子の言葉のあとは、しーんと静まったまま、何も聞こえてこない。しばし待ったところでようやく、「あ、あのお……」という、盛大に気まずそうな声が聞こえてきた。

「いったい……どういうことかな？」

散々困惑させられたツケを払わせたくて、啓史は皮肉をたっぷり混ぜ、やわらかに問いかけた。

6 やっかいな友

「あ、あの、父と母がですね。つ、つ、つまり、そのですね」

「榎原、必要な言葉だけ口にしろ！」

うわずった口調で、意味のない言葉を羅列するばかりの沙帆子を、啓史は思わず怒鳴りつけた。

「す、すみません」

「まず、今度の土日、お前の両親はどこに行くって？」

「それが、引越し先のところに行つて、向こうで住む家とか探すつてことになりました……」
「それで、お前は？」

答えはすでに知っているが、啓史はあえて聞いた。

「わ、わたし……はそのお……」

「俺のところ泊まりに来るつてののか？」

「そう……いう……こと……です」

ひどく言いにくそうに彼女は言う。

「どうやら、お泊まり話は……現実のことらしい。どうにも信じられない話だが……」

「お前……」

「は、はいっ」

「予定があつたんじゃないのか？」

「はい？ え、えつと、ですから、母が佐原先生のところにお泊まりに行けと……そんなの厚かましすぎると、もちろんわたしは思つたんですけど……」

「それが言いたかつたのか？」

「えっ？」

「さつき、ここで、言いづらそうにしたのは、このことか？」

「すみません。ほんと、とんでもないことですよ……」

申し訳なさそうに言う沙帆子に、口元が緩む。啓史の心から、重みが消えた。

週末の彼の誘いを、彼女は断ろうとしていたわけではなかつたのだ。

「なんだ、そうか」

安堵すると同時に罪悪感に駆られる。勝手に断られたと思つて、苛立ちをぶつけてしまうなんて……

て……

「あ、あの？」

「悪かつたな。さつき、ひどい言い方して」

「えっ？」

「ひとつ聞きたいことがあつたんだ」

謝罪を口にした照れと気まずさを早く消してしまいたくて、啓史は急いで話題を変えた。

「お前、あのとき、どこからやつてきた？」

「あのとき？」

「広澤と江藤が話していたときだ。突然ひよこひよこやつてきたから、驚いたぞ」

「物理室の窓から抜け出したんです」

「ああ、そうか。考えたな」

疑問が解け、すつきりした。そのあと沙帆子は、抜け出した物理室の窓の鍵を閉めておいてくれと頼んできた。もちろん、そのくらい造作もない。啓史は機嫌よく沙帆子の頼みを請け負つてやることにした。

そんなことより……

「弁当を作ってきてくれるんだって？」

「は、はい。なんかそのようなことに……ご迷惑でなければ作らせていただきます」
胸に嬉しさが膨らんだ。

「ふん。……窓の鍵、確かめといてやるよ」
「あつ、はい。よろしくお願いします」

地べたに這いつくばっていたのが、天へと上がってゆく気分だった。幸運の女神は、まだまだ彼の味方をしてくれるつもりらしい。

その後、テレビゲームのボクシングの話で、ふたりの会話はこれまでになく盛り上がった。

通話を終える前に、明日の朝、三十分早く学校に来ることを約束させたが、それをきっかけに、沙帆子がぐぐってきた垣根の穴のことに話が及び、彼は声を上げて笑った。沙帆子のほうも、不服そうにしながらも楽しんでるのが伝わってくる。

だが、自分がらしくないほどテンションを上げていることに気づいた途端、気まずくなり、啓史はそそくさと笑いを取めて通話を終えた。

明日は、あいつの手作りの弁当が食べられるのか？

閉じた携帯をポケットに戻し、喜びを噛み締めていた啓史は、空腹を感じて顔をしかめた。

考えたら、今日の食事は、昼の中身の無いパンが三個だけ……

さすがに、腹が減ったな……

立ち上がって白衣を脱ぎ捨てた啓史は、鞆を掴むと、急いで部屋から出た。

そうだ。物理室の窓だったな……

物理室の横を、そのまま素通りしようとしていた啓史は、沙帆子との約束を思い出し、足を止めた。別に、物理室の窓が一つ開いているくらいのこと、どうということはないと思うのだが、引き受けた以上、確かめないわけにはゆかないだろう。

あの教諭、いま部屋にいないだろうか？

物理の教諭は啓史よりふたつ年上だが、気が合いそうもないし、啓史が迷惑しているバケ子女史に好意を寄せている。そのせいで、恋敵扱いされるし……彼にすれば、まったくいい迷惑だった。

啓史は物理教諭の個室のドアに近寄り、物音がしないかと耳を澄ました。何を言っているかはわからないが、微かに声が聞こえる。電話でもしているのか？

啓史は顔をしかめた。いるんじや、物理室には入ってゆけないな。物音を聞きつけてやってこれたとしても……顔を合わせて、なんと説明する？

まあ、鍵なんて別にそのままでもいいだろ……確認して、すでに閉めたあとかもしれないな。

そう結論を出して、その場から立ち去ろうとしたとき、部屋の中から潜めた笑い声が聞こえ、啓史はぎょつとした。

女だ……この声？ ……もしやバケ子女史か？

啓史は、急いでその場から離れた。

はつきりしないが、どうもあの声は、バケ子女史だった気がする。

あのふたりがくつついたのなら、啓史にすれば、ありがたいことなのだが……
車に乗り込み、ほっとした気分で見つめた啓史は、きゅつと眉を上げた。
すきつ腹が、いい加減にしるよと叫んでいる。
まずは腹ごしらえだな……

ラーメン屋でラーメンを食べている最中に携帯が振動し始めた。左手でポケットをさぐって携帯を取り出し、急いで確認する。もしや沙帆子かと思ったが、そうではなかった。啓史は振動音無し視して、そのままポケットに戻した。ほどなく振動音はやんだ。

腹を満たして車に戻ったところで携帯を取り出し、啓史は先ほどの電話の相手にかけた。

「母さん、何か用？」

「今度の週末来るでしょう？ 先週末なかったし」

「用事があるんだ、行けない」

「まあ、飯沢さんと約束？ それとも、また兄さんのところ？」

母の言う兄さんとは、啓史の勤める龍華高校の学校長でもある橘の伯父のことだ。確かに、啓史の用事といえば、悪友の飯沢敦か伯父絡みの場合が多い。違うと言おうとして、啓史はためらった。ならどんな用事があるのだと聞かれたら、困る。

「飯沢」

「そう。それなら、次の週は？ 来るでしょ？」

「ああ。たぶん行くよ。また連絡するから」

啓史は軽く返事をし、さっさと電話を切った。

車をスタートさせ、運転しながら週末のことを考える。

沙帆子が来るんだよな。それも泊まりで……

進行方向に目を向けたまま、啓史は眉をひそめた。

泊まるってことは、もちろん寝る場所が必要だよな？ 彼女を、どこに寝かせればいいだろう？

ベッドは、ひとつしかないし……

それにしても……沙帆子の両親は何を考えているのだろうか？

いくら結婚が前提でも、男の家に、進んで娘を外泊させるなんて……

ああ、そうか……沙帆子の両親は、ふたりはすでに深い仲だと思っ込んでいるのだ。

でも、それにしたって……

「いいのかよ？」

啓史は思わず声に出して叫んでいた。

買い置きを使いかけたのは……どう考えても、あれだよな？

頭の中に思い浮かべたもののせいで、下半身が反応しそうになり、啓史は顔を歪めた。

おい、落ち着け！

どうやら、彼女が遊びに来るからと、浮かれてなどいられないようだった。

あいつのことだ。俺が一緒に部屋にいたとしても、気持ち良さそうな寝息を立てて、ぐーすか寝

るに違いない。男に襲われる可能性など、まるで考えない気がする。

布団は彼女用のものを買うとしても、自分の家に眠っている沙帆子がいるのに、我慢できるだろうか？ だが、なんの不安も抱かず無邪気に眠っている沙帆子を、無理やりにやっちまったりしたら……暴行……強姦……つてことになるわけで……

啓史は青ざめた。そんなことになったら、結婚どころか、彼女の信頼を失くし、俺は犯罪者……そして二度と逢うことも叶わなくなる……と。

たどりついた結末に、啓史は顔をひきつらせた。

「どうやら……とんでもない窮地に、陥ったのではなからうか？」

「どうする？」

車内に響いた、弱りきった自分の声に、啓史は苛立った。

「くそっ！」

危機感を感じるが、泊まりをなしにするなんて選択肢はない。ふたりの仲を深める絶好の機会なのだ。何はともあれ、布団を調達しておいたほうがいいだろう。

もうすぐ自分の家に着くというところで、啓史は急遽、進路変更した。財布に必要なだけの金が入っていたらと思うながら……

押入れに新しい布団一式を押し込んだ啓史は、精神的疲れを感じてソファに座り込んだ。

あさつては、九時半だったよな。そう考えながら、自分の部屋を見回す。

部屋はそこそ片付いているが……もう少し丁寧に掃除しといたほうがいいよな。

飯は、彼女が作ると言うだろうか？ まあ、外に食べに行ってもいいし……昨日と同じように、出来合いの惣菜を買ってくるのもいい。日曜の夜に送ってあげたいわけだから、家でゲームばかりじゃなくて、どこか彼女の喜びそうなところに連れて行ってやるのもいいな。

頭の中で休日の予定を立て終えた啓史は、立ち上がった。

「なら、さっそく掃除しとくか？」

寝室に入ろうとしたところで、携帯が鳴り出す。敦だった。

「なんだ？」

「出でせずに、なんだはないだろうよお」

「文句を言うための電話なら切るぞ」

「まったく、相変わらずつれない男だな」

「それで？」

「今度の土曜日、久しぶりに飲みに来いよ。俺がそっち、行くんでもいいけど」

「こっちは良くない。」

「都合が悪い」

啓史はそっけなく言った。

「なんだよお。また家に帰るのか？ 伯父貴の家か？ 予定変えろよ」

「無理言うな。俺にも都合ってもんがある」

「伯父貴んところなら、来週でもいいだろう？」

「伯父貴んところじゃない」

「実家なら、なおさら翌週でもいいだろう」

この男は！

「いいか。俺は用事がある。その用事は、伯父貴の家に行くことでもなければ、実家に帰るんでもない」

「へーっ、なら、その用事ってのは、なんだよ？」

啓史は言葉に詰まった。

敦の強引さにムカついて、言わなくていいことを言ってしまった。

「別になんでもいいだろ」

思わず吐き捨てるように言った瞬間、まずいと思った。

案の定、勘のいい敦が食いついてくる。

「お前、何があった？」

「なんのことだ？」

「女か？」

「ウザイ野郎だな。詮索すんな」

「マジ？ マジ、女かよっ？」

電話の向こうで敦が目をランランと輝かせているのが見えるようだった。こうなると、違うと言

っても疑うだろうし、そうだと素直に認めたら、詳しいことを聞き出そうとするだろう。

「勝手に言ってる」

啓史は邪険に言うのと、敦の言葉を待たずに通話を切った。

7 ふくれっ面の弁当配達人

ずいぶんと寒いな……

車を降りた啓史は、首元に冷たい空気を感じてコートの襟を立てると、急ぎ足で教員用の昇降口に急いだ。いつもより早いのだが、グラウンドからは運動部のかけ声が聞こえてくる。

沙帆子は家を出ただろうか？ 三十分早く来いと言っておいたから、いまは電車に乗っているところかもしれない。

前方に人の姿が見えた。用務員だ。啓史を見て手を上げ、にこやかな笑みを浮かべる。

「おはようございます。佐原先生、今朝はいつもよりお早いですな」

「おはようございます。寒いですね」

頭を下げながら挨拶を返す。

「まあ、いまの季節、こんなもんでしょ」

ありきたりの会話をし、用務員と別れた。

個室に入った啓史は、まずエアコンを入れた。今日は冷え込んでいるから、すぐには暖まらないかもしれない。

電気ポットの水を入れ替えてスイッチを入れると、鞆の中から荷物を取り出し、机に載せる。今日は、沙帆子のクラスの授業もある。これまで授業中の彼女の姿を、落ち着かない気持ちで窺い見ることはできなかったが……

あんなもどかしい気分……もう感じなくてすむのか？

やるべきことを終え、手持ち無沙汰になった啓史は、ソファに座り込んだ。数分じつとしていたが、なかなか来ない沙帆子と弁当に、そわそわしてきてしまう。啓史は沙帆子に電話をしてみることにした。

「も、もしもし」

沙帆子の声に、こそばゆさを感じる。ウキウキしそうになる自分を、啓史はいさめた。

「おはよう」

「あ、お、おはよう、ご、ございます」

ひどく焦っている沙帆子に、啓史は眉を寄せた。

「榎原、お前、何を焦ってる？」

「い、いえ、別に何も……」

その返事に、啓史はさらに眉を寄せる。

俺からの電話を、迷惑に思っているとか……じゃないよな？

ネガティブな思考を、啓史は頭から払い落とした。

「いま、どこだ？」

「はい？ 今ですか？ もうすぐ校門が見えるところまで来てますけど」

「弁当、持ってきたのか？」

「持ってきましたけど」

弁当の存在を確認した途端、啓史は空腹を感じた。お茶を買ってきてくれるように頼み、ついつい、ダッシュで来いと付け加えてしまう。

「ダッシュで？」

「ああ。のろのろしてたら、せつかくのお茶が冷めるからな」

彼女に早くやってきてほしいなんて気持ち、絶対に悟られたくないし、自分でも認めたくない。「わかりました」

「悪いが、頼む」

啓史は携帯を切りポケットに戻すと、窓に近づいて垣根を眺めた。

確か、あのあたりだったよな？ あいつの穴……

そのまま数分待つてから、窓を静かに開ける。

そろそろだろう……

そう思ったところに、沙帆子のものに違いのない頭が、垣根からにゅっと出てきた。そして、這いつくばったまま、啓史に顔を向ける。ここに啓史がいることを予想していたようで、彼女は目が合

つても驚くことなく、それどころかむっとした顔で睨んできた。
笑いが込み上げた。沙帆子のくせに……

「何がおかしいんですか？」

「何がおかしいか？ 愚問だな……」

「お前のその格好」

「そんなことわかつてます！」

彼の返事がよつぽど癪に障つたらしく、ずいぶんな大声で沙帆子が怒鳴った。

「榎原、声大きい。あたりに響く。だが、わかっているなら、なんで聞く？」

沙帆子は、顔をきゅつとしかめた。どうやらさらに怒りを煽られたらしい様子に、思わず笑い出しそうになり、啓史はぐつと堪えた。怒りの炎に油を注いで、これ以上、彼女の機嫌を損ねないほうがよさそうだ。弁当と一緒に、彼女が回れ右をして消える可能性がある。

いや、穴の中にいるいま、回れ右は現実には不可能か……

「早く来い。その穴、そんなに居心地がいいのか？」

沙帆子の頬がぷつと膨らんだ。愉快だった。穴から這い出して立ち上がった沙帆子は、膝小僧をこれ見よがしに叩くと、啓史の前に、ふくれっ面のままやってきた。

啓史は沙帆子から受け取った荷物を床に置き、彼女を抱え上げるために、両手を差し出す。

「ほら」

沙帆子は軽かった。彼女の身体に触れて、鼓動が速まる。

彼女は床に足をつくと、啓史を見上げてきた。ずいふんと不服そうな顔をしている。

「窓の外と中に、踏み台になるようなもの置いてもらえると、助かるんですけど」

そう怒りの口調で言った沙帆子の頬が、なぜかみるみる赤らんだ。

こいつ、すぐに赤くなるのな……

啓史は沙帆子の赤らんだ頬と瞳に、思わず見入った。

胸が甘く疼いた。彼女を抱きしめたくてならなかったが、その衝動をなんとか堪える。

「それは無理だな」

胸にある感情を押し殺し、啓史はそっけなく言った。

「どうしてですか？」

そんなところに踏み台があるのを誰かが見たら不審に思うはずだと啓史は説明した。沙帆子はすぐに納得したようなのに、「まあ、そうですね」と洪々という感じで頷く。

触れそうなほど近くにいる沙帆子……啓史を警戒することもなく、あまりに無防備なまま……

無意識のうちに、彼女に向けて手が伸びていた。

「それに……」

自分の手が彼女の頬に向かっていることに気づいた啓史は、手の行き先を彼女の右肩に変更した。彼女の肩に手を置くと、啓史は身を屈めて床に置いていた紙袋を手を取った。己を取り戻しながら、ゆっくりと頭を起こす。

屈み込んだまま顔を上げたせいで、ふたりの顔はいまにも触れそうなほど近かった。その距離に

彼女が驚いているのを見て、余裕が生まれる。沙帆子の顔を覗き込み、彼は口を開いた。

「お前には俺がいるんだ。踏み台なんかいらねいだろう？」

彼女を動揺させてやろうと、ワザと意味深に言ったのだが、口にした途端、顔が歪んだ。

さすがにいまのは、アホかと思うほど気障な台詞だった。できることなら口の中に戻したい。

耳のあたりが熱くなり、気まづくなつた彼は、沙帆子からさつと離れた。

ソファにどざりと座ると、まずペットボトルのお茶の蓋を開け、それから紙袋の中身を確かめる。

思ったとおり、中に入っていたのは弁当だった。啓史は口元をゆるめ、さつそく弁当を取り出した。

だが、弁当箱を見て、一瞬固まる。

なんだこりゃ？

この柄って……羽根か？

沙帆子の弁当箱……じゃないよな？

なにせ、かなりでかい。彼が以前、母親に持たされていた弁当箱よりも格段に……

「榎原？」

「は、はいっ」

彼に呼ばれて、ビビった様子で飛び上がった沙帆子も気になったが、それより……

「これって……」

啓史は沙帆子に向けて弁当箱を持ち上げてみせた。

上げられた弁当箱に合わせて、彼女の目玉も動く。面白い。

「誰の弁当箱なんだ？ お前のか？」

「はい？」

なんのことかというように返事をした沙帆子が、彼の側にやってくる。

「それ、先生のです」

「は？」

「俺の？」

面食らつた啓史は、思わず問い返した。沙帆子がかくりと頷く。

「昨日母が買ってきたんです。先生にっつて」

「お前の母親……」

まだ蓋を開けていない弁当箱を見つめ、啓史は知らず顔をしかめた。

「こういっちゃなんだが……趣味悪いな」

それもかなり……

「先生、白が好きって言ったから」

「白？」

「昨日の話なら、俺は白とピンク、どっちもそんなに好きじゃないって言ったんだぞ」

「え？」

「それにしたつて、弁当箱に白はないだろ。それもこんなデザイン。買うやつも買うやつだが、売るほうも売るほうだな」

買ってもらったものに文句を言うべきでないのはわかってはいるが、あまりの趣味の悪さに本音が転がり出てしまった。当然だろうが、沙帆子はむっとしたようだ。

「そんなに気に入らないなら、返してください」

そのとおりだ……。だが、せつかくの沙帆子の手作りだ。弁当箱にどれだけ難点があるうとも、返す気はさらさらしない。

「せつかく早起きして先生のために作ったのに……」

頬を膨らませて文句を言う沙帆子を見つめて、啓史はひそかに笑いを漏らした。

「拗ねるな。中身には、まだ文句言っていない」

啓史はそう言うと、弁当の蓋を取った。

ずいぶんとうまそうだった。空腹だからか、黄色い卵焼きが光つてさえ見える。

さっそく食べようとした啓史を、沙帆子が慌てて止めてきた。いま食べてしまったら昼はどうするのだというわけだ。だが沙帆子の制止など無視して、啓史は卵焼きをつまんで持ち上げる。

「うまそうだな。弁当箱には難があったが、中身はいまのところ、見た目合格点だ」

「どうも」

甘めの味つけでなければいいかと思いつつ、卵焼きを頬張った啓史は、口をゆっくりと動かした。

「うん。塩味がきいててうまい」

「そ、そうですか？」

卵焼きのうまさど、沙帆子の嬉しそうな反応に啓史は気を良くし、次のおかずを口に放り込む。

「それにしても、白とピンクってなんの選択だったんだ？」

啓史は次々に食べながら、気になっている疑問を口にした。

「はい？ ですから、この弁当箱……」

「違うだろ」

「違う？」

どうやら沙帆子はまったくわからないらしい。

白とピンクか……。沙帆子の母親は、啓史には考えの及ばないことを考えていそうだが……

「まあいい。いずれわかるだろう。お前、料理はまずまずだぞ」

彼の褒め言葉に、沙帆子の顔がパツと輝いた。

「そうですか？ ありがとうございます」

ぴよこんと頭を下げる沙帆子の仕草は、かなり愛らしかった。

腹を満たすことに夢中になって気づかなかつたが、彼女はずっと立ったままだ。

「座れば」

隣に座るように促すと、沙帆子は素直に頷き、「は、はい。それじゃ」と遠慮がちに腰かけてくる。

啓史は、かしこまって座っている沙帆子を見下ろした。

沙帆子と並んで腰かけ、彼女の手作り弁当を食べてる自分……不思議な感覚に囚われる。

これ、現実なんだよな？

「うまかった」

啓史はそう口にし、弁当に蓋をした。勢いで全部食べそうになるのをなんとか堪えたものの、結局半分以上食べてしまった。

「なくなっちゃいましたね」

ポツリと口にされた気がかりそうな彼女の言葉に、お茶を飲んでいた啓史は、ポケットに手を突っ込んだ。取り出した財布から、千円札をあるだけ抜き取る。

「これ」

啓史が差し出した紙幣を、沙帆子は見つめるばかりで受け取らない。押し付けようとしても立て替えたお茶の代金には多すぎると、受け取りを拒否する。そんな彼女に、啓史は昼飯を食べたあとでいいから、パンを買ってきてくれるように頼んだ。

「わたしが？ な、な……」

ど、どうしてわたしが……というような表情をする沙帆子に、啓史は鋭い目を向けた。

その眼差しに抗えなくなったのか、沙帆子が金を受け取る。

「昼休みに、学内をあんまりうるつきたくないんだ。特に、購買部のあたりは暇な生徒がうるついでるからな」

「先生、職員室には行かないんですか？」

昼休みの職員室は、啓史にとつて、居心地がいいとは冗談でも言えない場所になっている。「必要に応じて行ってる」

バケ子女史を避けるために自分がどれだけ苦労しているか……こいつには、想像もつかないだろう。

ふいに啓史は昨日の出来事を思い出した。バケ子女史と物理教諭、たぶん、付き合い始めたんだよな？ ということは、これからはバケ子女史に悩まされずに済むんじゃないだろうか。ならば、

職員室にも気軽に行けるようになるのか？

「あそこだったら」

啓史は、沙帆子の言葉に意識を戻した。

「生徒はあんまり近づいてこないんじゃないんですか？」

近づいてくるのは、生徒ばかりじゃないんだよ……

啓史は胸の内で沙帆子に返事をし、話題を変えた。

「そんなことよりお前、ジャムみたいな中身が甘いパン買ってきたら、また自分が処理することになるってこと、忘れるなよ」

「えーっ？」

迷惑そうに沙帆子が叫び、啓史は眉を寄せた。

「気分が悪くなるんだ。仕方がないだろう」

「甘いもの、そんなに苦手なんですか？」

「体質的に受けつけない」

「体質的？」

そう呟いた沙帆子の瞳に、なにやら理解の色が浮かんだ。

「わかる気がします。わたしも……」

途中で言葉をとめた沙帆子が、啓史を見つめてきた。

「いったいなんだ？」

「先生、煙草って、やめたんですか？ 吸ってましたよね」

啓史は思わず顔を引きつらせた。

この野郎……

のほほんとした顔で言いやがって……誰のせいでやめることになったと思ってるんだ。

怒りが表情に出ているのだろう、啓史の顔を見つめていた沙帆子の顔が、恐れに歪んだ。

「せ、先生？ あ、あのっ」

「吸いたくなくなったからやめたけど……それが？」

「い、いえ。い、いいんじゃないでしょうか？」

軽く言いやがって！ な気分だった。

「何が？ いいんだって？」

ずいっと沙帆子に顔を寄せた啓史は、むかつきにまかせて彼女を見つめた。

「い、いえ。身体に……」

逃げ場をなくした沙帆子は、啓史の身体を両手で押し返し、パツと立ち上がる。

「そ、そろそろわたし……それじゃ、あ、あの、きよ、教室に戻らないと……」

彼女は慌てて窓に駆け寄ると、窓枠に足をかけようとしてじたばたし始めた。その慌てっぷりに、啓史は笑いを堪えた。もっといたぶってやりたかったが、確かにもう時間がない。啓史は、なんとか窓枠に片足を乗せた沙帆子の脇に手をかけ、彼女をひよいと持ち上げた。

「す、すみません」

沙帆子の言葉に「ああ」と頷き、啓史は沙帆子の身体を窓の外に下ろした。

振り返った沙帆子は、彼の表情に安堵したようだ。

「そ、それじゃあ」

「ああ。昼休み、忘れるなよ」

「はいっ」

生真面目な返事をした沙帆子は、穴に潜り込み、あっけないほど早くその姿は見えなくなった。

8 悪ふざけの恩恵

啓史はふっと息を吐き、浮き足立っている自分を落ち着かせようとした。

これから、沙帆子のクラスの授業だ。これまでと同じように、教師として振る舞えばいいのだと思っのに、どうも胸のあたりが落ち着かない。

啓史は授業開始のベルが鳴る前に、ドアを開けて化学室に入った。少し早く現れた啓史に気づい

た生徒が口を閉じたからか、ざわついていた室内が少しだけ静まる。

ゆっくりと教卓に向かつていく間にベルが鳴り、啓史は教材を置いて室内を見回した。

すでに全員席についているようだ。

「そういえば……昨日の授業で、沙帆子たちは遅刻してきたが、何があったのだろうか？」

「起立！」というクラス委員のかけ声が響き、全員が立ち上がる。啓史は、沙帆子へと視線をさつと飛ばした。その瞬間、ふたりの目が合った。彼女はうろたえた様子ですぐに目を逸らしてしまつたが、啓史は満足だつた。

授業は順調に進んでいったが、その後の沙帆子は、全く啓史を見ようとしなかつた。

「こいつ、俺と目を合わせたくないってのか？」

「ここは重要点だぞ。ちゃんと頭に入れとけよ」

コンコンと黒板を叩きながら言うと、全員が、ノートにカリカリと書き込み始めた。

「書き終えたら実験に入るからな、さつさと準備しろよ」

実験の準備が始まると、教室が活気づいてゆく。啓史はそれぞれのグループを監督しながらゆつくりと移動した。生徒たちが一番熱中しているあたりで、啓史は、沙帆子のいる班に近づいていった。そして、わざと沙帆子の真後ろから様子を見る。啓史がやってきていることに気づいているのは、沙帆子の向かい側に座っている三人だけだ。沙帆子の親友の飯沢千里と江藤詩織、そして天野。

「この反応って、こんなもんか？」

沙帆子の右隣に座っている男子生徒が言い、江藤が顔をしかめて覗き込む。

「やつぱりこれって、この薬品が、足りてないんじゃないかな？」

「そう言つて、手にしたものを差し出す。だが、残念ながら外れだ。火力が弱いようだが……」

「そ、そう？」

薬品を目にした沙帆子は、ひどく不安そうに言い、手元のプリントに目を落とした。沙帆子たちの班は、毎回実験を仕切る当番を決めているらしく、飯沢と天野、そしてもうひとりの男子生徒は、危ぶむような目をしつつも、黙って実験の様子を見守っている。

「それじゃあ、入れるよ」

大雑把な性格の江藤は、たいして考えもせず、小さなスプーンにすくつた薬品を入れようとする。啓史が口を開こうとしたとき、沙帆子が「ちょ、ちょっと待つて」と焦つたように止めた。啓史と同様に身を乗り出そうとしていた飯沢と天野も、ほつとしたように肩から力を抜く。

「や、薬品の計量は間違つてないし……あの、たぶん、火が弱いんじゃないかなあつて思うんだけど」

彼女の言葉が終わるのを待つて、啓史は沙帆子と男子生徒の間に割り込むように身を乗り出した。

「榎原の言うとおりみたいだな」

「えっ、そうなんですか？」

江藤は薬品を盛つたスプーンを手にしたまま、啓史に顔を向けてきた。

「ああ、それを入れたら、ちよつとばかし、大変なことになるぞ」

啓史の言葉にぎよつとした江藤は、手に持っていたスプーンを揺らした。薬品が机に零れる。

「ドカーン！」

「きゃあ！」

沙帆子と江藤が頭を抱えて悲鳴を上げた。天野がふざけたのだ。

「おい、天野。悪ふざけが過ぎるぞ」

「すみません」

思わず勢いでやってしまったらしい。天野は申し訳なさそうにぺこぺこ頭を下げて謝る。

反省の様子がなければ、パネルティを科すところだが、その必要はなさそうだ。

啓史は頷いてその場を離れたが、胸の内ではやついていた。

沙帆子が悲鳴を上げた瞬間、ふたりの身体がしっかりと触れたのだ。派手に驚かされたときのことだったから、沙帆子のほうは触れたことに気づかなかったかもしれないが……

授業が終わり、啓史は教材を手に取りながら、さりげなく沙帆子を窺った。

飯沢と江藤と連れ立って、ドアに向かってゆく沙帆子が一瞬、啓史のほうを向いた。

啓史はただ沙帆子の目を見返した。

自分の部屋に引き上げた啓史は、手を洗い、さっそく弁当を取り出した。

ペットボトルのお茶も、まだ半分ほど残っている。

弁当の蓋を開けた啓史は、中身の少なさにがっかりした。朝、自分が食べてしまったのだから、当然なのだが……

ちびちび未練がましく食べるのが嫌で、啓史は残りの弁当をかき込むようにして食べた。うまか

つたが、満足できる量ではない。

パンが届くはずだしな……

啓史はお茶を飲んでから立ち上がり、窓の鍵を開けて外を眺める。

もちろん、まだ昼休みになったばかりだし、沙帆子が来るのはだいぶ先だろう。

座ってもう一口お茶を飲んだ啓史は、ソファに寝転がった。

昨夜、沙帆子が泊まりに来ることを考えて眠れなかつたせいで、少々眠気がさしてきた。

啓史はうとうととしている自分を感じながら、眠りの中に溶け込んでいった。

9 手放せない現実

前髪の生え際あたりに、何か違和感を感じ、啓史は眠りの中から引き戻された。

目覚めた途端、啓史は自分に触れているものにどきりとし、またまた瞼に載せていた腕を反射的に動かし、自分に触れているものを掴まえた。

「ひゃっ」

小さな悲鳴が聞こえた瞬間、啓史の目は沙帆子の顔を捉えていた。

現……実？

まだはつきりしない頭をもどかしく思いながら、啓史は目の前にある沙帆子の顔を見つめた。

現実だよな……？

「……お前か……」

「すみま……」

啓史は無意識に腕を伸ばし、沙帆子の頭を自分に引き寄せていた。

「え？」

まだ完全に目覚めていない中、彼女の存在に、啓史は至福を感じた。

俺のもんだ……。意識が囁く。

彼の指は、本人の意識しないところで、彼女の首を愛撫し、沙帆子を胸に抱き寄せていた。なんとも言えない、いい匂いがした。

「お前……」

「は、はい？」

「いい匂いがするな」

「そ、そうですか？」

これは……現実だよな……？

繰り返して自分に問いながら、啓史は彼女の存在を確かめるように、髪の間指を差し入れ、甘い感触を楽しんだ。

沙帆子は、彼の行為を受け入れている。もちろん嬉しかったが、密着している彼女の身体に、啓史の身体が正しい男の反応を始めようとする。

まずい……

「いま、何時だ？」

啓史は気を紛らわすために、沙帆子に話しかけた。

自分の反応に危険を感じたが、この至福をすぐには手放したくなかった。

「え？ ……つと……あと十分くらいしかないとします。休み時間」

十分か……思ったより長いこと眠ってしまったようだ。

「そうか。パンは？ 買ってきたか？」

「は、はい。でも、甘いのしかなくて……」

「別にいいさ」

申し訳なさそうな沙帆子にそっけなく答え、啓史は彼女の頭から汗々手を引いた。

これ以上密着していたら、すでに危ういところまで追い詰められている理性が、崩壊しそうだ。

だが、実際に沙帆子が顔を上げて彼の胸から離れてしまうと、物足りない思いに囚われる。

啓史は、彼女の心を読み取るうと、沙帆子をじっと見つめた。

「なんですか？」

沙帆子は頬を真っ赤に染め、困惑混じりにそう聞いてくる。

彼女も感じたのだろうか？ 啓史が感じていたような、性的な感覚を？

そんなこと聞けるわけがない。啓史は起き上がると、沙帆子に向けて手を伸ばした。

「パンは？」

沙帆子は何か言いたそうな眼差しを向けてきながらも、紙袋を差し出した。「ジャムパンと、クリームパンしかなくて……」

ひどく申し訳なさそうな言葉が添えられた。

「そうか」

そっけなく返事をした啓史は、パンを掴み出し、当たり前のように沙帆子の前に差し出した。

受け取った彼女は素直にビニール袋を開けてパンを取り出すと、半分に割って、目を伏せて舌先でジャムを舐め始める。啓史は、その姿にぎよつとした。

こ、これって……ずいぶんとエロく……ないか？ き、昨日もこうだったのか？ まるで気づかなかった……

舐め終えたのか、沙帆子が顔を上げてきた。激しく動揺していた啓史は、目が合う直前、さっと視線を逸らす。

「先生？ あの、これ」

「あ、ああ」

啓史は視線を外したまま、手を差し出し、ジャムのなくなったパンを受け取った。

そつと窺^{うかが}うと、彼女は残り半分のジャムを舐める作業が続いている。顔が歪んだ。

俺……こいつに、何やらしてんだ？ こいつもこいつだ。こんなこと……いくら俺に強制されたからって……

啓史はごくりと唾を呑み込むと、気を紛らわそうと、手にしたパンを口に入れた。

なんだか、眩暈^{めまい}がするほど甘い罰を受けている気がした。

啓史は頭の中に湧き上がろうとする妄想を揉み消し、立ち上がった。

「榎原、コーヒー飲むか？」

「でも、もう時間が」

腕時計で時間を確かめると、確かに残り五分しかない。

「けど、口の中が甘いだろ。それじゃ、これでも飲んでけ」

啓史は自分の飲みかけのお茶のペットボトルを差し出した。

「あ、ありがとうございます」

どうやら、かなり嬉しかったらしい。いくら甘党でも、ジャムだけ舐めるのは辛いだろう。

ジャムを舐め取ったパンを、ビニール袋の上に置くと、沙帆子はもう一つのパンを手に取る。

彼女の真面目さと素直さは、もう充分すぎるほどだ。これ以上やらせたら、眩暈^{めまい}どころでない罰

を受けそうだ。啓史は彼女の手から、そつとパンを取り上げた。

「このパンはもういい。そろそろ行かないと間に合わなくなるぞ。五時間目、俺のせいで遅刻させたくないからな。ほら、早くお茶を飲め」

「は、はい。それじゃ、お言葉に甘えて」

沙帆子はペットボトルの蓋を取ると、顔を傾けて、こくこくと可愛らしくお茶を飲んだ。

お言葉に甘えて……か。笑いが込み上げそうになり、啓史はぐつと堪^{こた}えた。

「それじゃ、明日九時半にな」

窓の外に出て、すぐに穴に向かおうとする沙帆子に、啓史はそう声をかけた。

「は、はい」

沙帆子は律儀に振り返り、小さく頭を下げて穴を潜る。彼女を見送って、ソファに戻った啓史は、深いため息をついた。明日、彼女が泊まりに来ることに、一層の危機感が湧いていた。

いま程度の触れ合いでも、我慢の限界がきそうになっているのに……

性欲というものは、どうやら思っていたよりも凶暴なようだ。

理性でなんとか抑え込めるだろうか？

だからといって、彼女のお泊まりを諦められるほど、彼は聖人ではない。

啓史は沙帆子が残していったジャムのないパンを手にとると、自分に怒りを向けながら口に押し込んだ。

10 お楽しみ の 限界

風呂から上がった啓史は、濡れた髪を適当に拭きながら居間に入り、部屋の中を点検するように見回した。

気分が落ち着かない。明日の土曜日、沙帆子がこの家にやってくる。しかも、一泊するのだ。

すでに一度、彼女をこの部屋に入れたが、あのときと今では、まるで事情が違う。

結婚の話は、信じられないことにまだ継続しているようだし……

あいつ、俺と結婚するってことを、いったいどう受け止めているんだろうか？

まったく彼女の気持ちが読めない。まだ沙帆子の両親のほうを読めるくらいだ。

しかし………続いているとはいえ………危ういよな………

本当に結婚できる可能性は………一桁………数パーセント………か………

沙帆子の両親は、彼女が一言、結婚などしなとは言えは、すべてをなかつたことにするだろう。

それに………啓史のことを、娘に相応しい男かどうか、見極めようとしているはず。相応しくないと判断されれば………即座に結婚話は消滅。

啓史はふっと息を吐き、ソファに座り込んだ。

だが、これはチャンスなのだ。そのチャンスを生かすために、お前はできることをやるんだろう？ 自分に活を入れた啓史は、顎に手をかけて考え込んだ。

結婚話は、いけるところまでいけばいいという気持ちでいけばいいだろう。途中で立ち消えになったら、それが当然と思うくらいいい。それよりも、彼女に彼を異性として強く意識させることが必要だ。

とにかく一緒にいる時間を増やして、ふたりでいるのが当たり前くらいに……

いまの沙帆子は、広澤に好意を寄せているんだろうが、やつを出し抜いて、なんとしても、彼女の気持ちをこちらに向けさせなければ………

そういえば、今日……俺、あいつをこの胸に抱き締めたんだよな。

彼女は嫌がっていなかった。髪に指すら絡めて……あんなこと、広澤とはやっていないよな？
付き合ってたどいらないんだから……

啓史は眉を寄せた。

自分と沙帆子の距離は、すでに広澤より近いと思っていいんじゃないか？

こんな考え、甘いだろうか？

彼女が泊まりに来て、ふたりきりになれたからといって調子に乗らないようにすべきだな。抱き締めたり、キスをしたくなったりしても、用心深くないと……すべてを壊してしまいかねない。

いまの俺にとって、もつとも大事なことは……彼女に嫌われないこと……なんだろうな。

啓史は自分の分の悪さに苛立った。あー、ムカつく……

とにかく、外堀から埋めてゆくか？

これからの一週間を無事に乗り越えたら、沙帆子を自分の実家に連れて行ってしまおう。だが、

兄の徹は……どうする？

沙帆子は気づいていないと思うが、啓史の兄である徹は、沙帆子の中学のときの担任だ。徹が啓史と沙帆子のことを知り、反対されたら……やっかいどころではない強敵になるに違いなかった。

ふたりを会わせないで済むなら……そうしたい。もちろんいずれは会わせなければならぬだろうが……せめて来週は……

結婚つてのが万が一にも現実になるようなら、橘の伯父にも話さないわけにはゆかないし……

先行きに不安を感じて、顔をしかめた啓史だが、ふっと笑いが込み上げてきた。

お前ときたら、本当に結婚が現実のものになると思ってるのか？

先走る自分に苦笑しつつ、啓史は立ち上がった。

だが、まだ結婚話は継続してるんだ。可能性はゼロじゃない。だろ？

ならば、可能性を大切に、できることをするさ……

仕事場に行っている部屋に入ると、啓史はパソコンの前に座り込んだ。

ネットに繋いで「結婚」と入力し、検索ボタンを押す。

結婚……その二文字が太字となって、ずらりと検索結果が表示された。

下に向けてスクロールしていた啓史は、ふいに動きを止め画面を注視した。

婚約指輪？ そうか、そんなものも必要なんだよな……

啓史は椅子の背にもたれた。

婚約指輪を買って渡すつてのは、いいんじゃないだろうか？

彼女はその指輪を見るたびに、啓史を婚約者として意識することになるだろう。

翌朝は快適な目覚めとはいかなかった。昨夜、なかなか寝付けなかったせいも、なんとはなしに頭がすっきりしない。啓史は顔を洗うと、空腹感にせつつかれて冷蔵庫を開けたが、もちろん買い物をしていないのだから、たいしたものが入っていない。

いつもこうだ。腹が減っているとき以外は、食べ物に無頓着なのだ。

唯一腹を満たしてくれそうな牛乳パックを取り出し、重みで量を予測した啓史は、そのままパックに口をつけて飲み干した。

あいつを迎えに行く前に、ファミレスで朝飯でも食うか……

啓史はそう決めて、さっそく支度を始めた。

週末のファミリーストランは、名前どおりファミリーなお客たちで満員の状態だった。

啓史はタイミングが良かったのかすぐに座れたが、ひとりきりなのに大きなテーブルを与えられ、居心地がいいとは言えなかった。沙帆子を迎えに行つてから一緒に来れば良かったと思つたが、いまさらそんなことを考えても遅い。啓史は出てきた品をフルスピードで平らげ、コーヒーを二杯飲んで店を後にした。

約束の時間の少し前に榎原家のアパートに着き、啓史はほっとした。

良い印象を保つために、約束の時間は厳守しなければ……

ほぼ時間ぴったりに玄関の前に辿り着いた啓史は、速まり出した鼓動を無視して、呼び鈴を鳴らした。すぐに、沙帆子の母芙美子が出迎えてくれる。

「啓史君、いらつしやい」

明るい笑顔の出迎えに、緊張がほぐれた。

「おはようございます」

「おはよう。時間ぴったりね」

啓史は返事をせずに、軽く頭を下げた。芙美子の背後を窺つてみたが、沙帆子の姿はない。その啓史の視線に気づいたらしく、芙美子は後ろに顔を向けて大きな声で叫んだ。

「沙帆子、何やってんの、啓史君来たわよお」

「え、ええっ!! も、もう来ちゃったの?」

近くのドアの中から、驚きの叫びが聞こえた。芙美子はおどけたように肩をすくめ、そのドアを開けて中に顔をつっこむ。そこが沙帆子の部屋らしい。

「もおう、沙帆子、まだなの?」

「だって、どれ着たらいいのか、もうわからなくなっちゃってえ……」

沙帆子の言葉に、芙美子は呆れたように首を振り、「しようがない子ねえ」と言いながら部屋の中に入ってしまった。漏れ聞こえてくる親子の会話に耳を傾けながら、玄関で待つ。

父親はどうしたのだろうか? 奥にいるのではないかと思つたが、出てくる気配はなかった。

しばらくして、母親が出てきた。

「啓史君、ごめんさいねえ」

芙美子はそう謝りつつ、靴箱から靴を取り出している。どうやら、沙帆子のものらしい。

黒色で小さなリボンがついた靴だ。

「それで、啓史君、今日はどこかに行く予定とかあるの?」

顔を上げながら芙美子が聞いてきて、啓史は小さく首を横に振った。

「いえ、まだ何も予定とかは。彼女と話して決めようかと……あの……」

啓史は沙帆子の父をどう呼ぶべきか迷って口ごもった。
「なあに？」

「いえ、あの……幸弘ゆきひろさんは？」

「ああ。拗ずねちゃってるの」
「は？」

拗ねて？ 娘の外泊が嫌でということなのか？

まあ、当然といえば当然か……

「わたしのことは芙美子さんでいいわよ」

「え？ あ、はい。それじゃ、そう呼ばせてもらいます」

「幸弘さんのことは、気にしないでいいのよ」

「そうですか？」

「沙帆子のこと、一生自分のそばに置いておけないことくらい、幸弘さんもわかってるの。でも、やっぱり駄々をこねたいのよ」

「すみません」

どうして謝罪の言葉を口にしたのか、自分でもわからなかったが、自然とその言葉が出てきた。

だが、芙美子は啓史の言葉を笑うことなく、真面目な顔で頷き返してきた。

「沙帆子のこと……大事にやってね」

小声で芙美子に言われ、啓史はどきりとして表情を改めた。

マジで進んでいる。そう思った。

沙帆子の両親は、沙帆子と啓史の結婚を、真剣に考えている。そのことを理解した瞬間、武者震いのようなものが走った。

この結婚……現実になる。

啓史は沙帆子の母をじっと見つめ、口を開いた。

「もちろんです」

「はい。それじゃこれ」

芙美子は、その場においてあった鞆を持ち上げて、啓史に差し出してきた。張りつめていた空気が、はじめからなかったかのように緩んでしまっていることに、啓史は戸惑った。芙美子に対して、頼りがいとともな強い恐れを感じる。味方になってくれれば心強いが、敵になったらやっかいな相手……どうやらそれは、徹だけではなかったらしい。

差し出されているものを受け取った啓史は、とぼけた代物に眉を寄せた。

膝ひざのバスケットだ。こんなので、桃色のものなんて、あるんだな。

ドアが開き、沙帆子が現れた。黒のワンピース、手には白っぽいコートを持っている。制服姿より、格段に大人っぽく見えた。唇はほんのり桃色に色づいている。薄く口紅を塗っているようだ。もしかしたら、少し化粧をしているのだろうか？

「ほら、沙帆子、恋しい彼を見つめてたい気持ちにはわかんないでもないけど……」

沙帆子に見入っていた啓史は、芙美子の言葉に我に返り、赤みを帯びている沙帆子の頬を改めて

見つめた。啓史のことを恋しい彼だなんて言われても、黙って受け入れてるってのは……沙帆子に、そういう気持ちがあるからでもあるってことなのか？

「荷物は、もう啓史君が持ってくれてるわよ。それじゃ啓史君、沙帆子のことお願いね」
「はい」

啓史はきつちりと頷いた。

すぐに出ようとしたが、沙帆子は彼に問うような瞳を向けたまま動こうとしない。

啓史は焦りに駆られた。こいつまさか、いまになってためらってるのか？

もうここまで来たんだ。さっさと諦めて、靴を履けばいいのに……

何か聞きたいことがあるなら、ふたりきりになってからでいいだろうと伝えるために、啓史は沙帆子の瞳を見返した。思いどおりにゆかないもどかしさが、啓史の眉間に皺を作る。

「幸弘さん、沙帆子行くわよ。幸弘さんてば」

芙美子が部屋の奥に呼びかけたが、なんの返事も無い。

「好きになさーい」

芙美子の、まるで子どもにかけるような言葉に、啓史はふっと力が抜けた。

「それじゃ、楽しんでね」

やっと靴を履き始めた娘の肩を、芙美子はぼんと叩く。

どの程度、楽しんでいいのだろうか？

啓史は玄関を出てゆきながら、上の空で自分に問いかけた。

11 胸キュンな、はにかみ

「どこに行くんですか？」

車が予想外の方向に曲がったことに驚いたらしく、沙帆子が聞いてきた。

「買い物しないとな」

いくぶんぞんざいに啓史は答えた。婚約指輪を買いに行くつもりでいるのだが、そんなこと伝えられやしない。

大型のスーパーの駐車場で車を降りる。彼の後ろをついてきていた沙帆子は、スーパーの中へ入ると、物珍しそうにキョロキョロと店内を見回した。

「専門店も多いんですね」

「ああ」

宝飾店は、スーパーのほぼ中央、エスカレーターの近くの、かなり目立つ場所にある。ほかにも宝飾店はあるのかもしれないが、わざわざ別の店を探しに行くこともない。指輪の値段も品も、どこだっただいして違わないだろう。

宝飾店を目指して歩いていた啓史は、突然沙帆子に引っぱられた。

「先生」